

平家物語巻九の小宰相の

返歌の解釈について

瀬 良 基 樹

一、序論

平家物語巻九にみえる小宰相の身投げについては、建礼門院右京大夫集に、彼女が上西門院に仕えた女房で美人であったこと、さる人が思いを懸けていたが通盛に取られてしまったこと、一谷合戦で討ち死にした通盛の後を追って底の藻屑になったことが語られている。この「小宰相身投げ」の章は、源氏物語の浮舟の入水や狭衣物語の飛鳥井姫の身投げのように、単に平安朝的な哀愁の物語として述べられているのではなく、また十訓抄や留我物語のように、彼女の入水を二夫にまみえない貞女譚として捉えているのではない。そこには戦乱の中世を生きた一人の女性の真実が語られている。ここでは、小宰相の身投げの意味を知る上で必要な、彼女の通盛に対する返歌の解釈について考察しようと思う。

なお、平家物語の本文は、日本古典文学大系本平家物語によった。

二、本論

(一)

平家物語巻九「小宰相身投げ」の章の通盛から贈られた歌

我こひはほそ谷河のまろ木ばしふみかへされてぬるゝ袖かな
に対する小宰相の返歌（実際は上西門院の代作であるが）、

ただたのめほそ谷河のまろ木橋ふみかへしてはおちざらめやは
の解釈については、古来異説がある。

平家物語考証は、「細谷河ノ和歌ハ納幣ノ贈答ノミ実ニ此ノ如キ事アルニアラス（巻之九 小さいしやうの事）」と言って、この歌を二人が恋の成就を願って幣に添えて神に奉ったものとしている。

日本古典文学大系本平家物語は、この歌の第四、五句の主語を橋とし、その橋を小宰相の恋の比喻と考え、「やは」を詠嘆の助詞にとって、「どうぞ細谷川の丸木橋を信頼して下さい。たとえ、か弱い橋であろうとも、人に踏まれたとて落ちるような気の弱いことは決してありませんから。」と解釈する。

一方、佐々木八郎氏「平家物語評議」によると、「おち」は橋から下に落ちることに飜して、通盛の思うつばに落ちてその心になびく意とし、「やは」は反語の助詞にとる。その意味は、「絶望せずにとただ一筋に希望を持て。細谷川にかけた丸木橋は踏みもどれば落ちる道理で、手紙を返却して、それでそのまま落ちないわけがある

うか。」とする。

富倉徳次郎氏「平家物語全注釈」によると、「ふみかへし」は「文返し」と「踏み返し」の意味をかけ、「落ちざらめやは」は、橋から落ちる意と申し出になびく意をかけているととり、「ひたすらあてになさって下さい。細い谷川にかかっている丸木橋を踏み返すように、あなたに返事をさしあげますからにはお言葉に従わずにはいられません。」と解釈する。

ところで、この「落つ」を「なびく」と訳すと、小宰相のやさしさが強まるのであるが、古典に見られる、男女の間柄に用いられている「落し」は、

法師の扇をおとして侍りけるをかへすとて

和泉式部

儚くも忘れにける扇哉おちたりけりとひとこそ見れ

(後拾遺和歌集卷二十俳諧歌)

のように、「五戒の中の邪淫戒を破る」意を表わしたり、

寄 流と言ふ事を詠ませ給うける

後小松院御製

何時よりか妹背の中に落ち初めて吉野の滝を袖にせくらん

(新編古今和歌集卷十一恋歌)

のように、「(恋に) 陥る」の意に用いられている。しかし、後者の歌は「妹背の中」と結びついて用いられている。また平家物語を調べてみても、「落つ」が単独で「なびく」の意を表わしている用例は見当たらない。

この小宰相の返歌は、「まろ木橋」の縁で「落ち」と言っているの

だから、単純に「なびく」の意にとらないほうがよい。そこで、この「落つ」の語意を明らかにし、この歌にこめられている小宰相の真意をつかむために、次に彼女の身投げの意味について考えてみようと思う。

(二)

万葉集卷九及び大和物語百四十七段にみえる、葦屋の菟原処女が血沼社士と菟原社士の二人に求婚されて思い悩んで生田川に投身し、二人の男も後を追って果てたという話のような処女塚式妻争い伝説は、万葉集卷九の勝鹿の真間の手児奈の話(多くの男に言い寄られた手児奈は港に投身自殺する)、万葉集卷十六の桜子の話(二人の男に求婚され、桜子は縊死する)や緩児の話(三人の男に求婚された緩児は耳無の池に入水する)にもみられる。いずれも、一人の純情な処女が複数の男に求婚されて進退に窮し、死を選ぶに至るという処女の深い思いが語られている。

また、大和物語百五十段には、奈良の帝に仕えていた采女が、一度帝の寵愛を受けて以来帝恋慕の気持ちがつるにもかかわらず、その後は帝から顧みられなかったために悲観し、ある夜猿沢池に投身した話が載っている。身を犠牲して自分から言い出すことのできない恋に落ちた采女は、死を賭してもその純愛を貫こうとしている。

一方、源氏物語の浮舟は、積極的で情熱的な匂宮と、真面目で義理固い薫との板挟みになり、どちらとも決めかねて、「昔は、懸想する人の有様の、いづれとなきに、思ひ煩ひてだにこそ、身を投ぐる例もありけれ。長らへば、必ず、憂き事見えぬべき身の、亡くな

らんは、何か惜しかるべき」(源氏物語「浮舟」と考え、ついに宇治川に投身自殺を計る。横川の僧侶は、宇治の院の木の下に倒れていた浮舟を救い、物の怪を調伏する。ここで作者は、浮舟の入水は実は彼女の意志からしたものではなく物の怪のしわざであったということを、物の怪の口を通して語らせている(同「手習」)。しかし、たとえ物の怪に取り付かれ前後不覚の状態で投身したにせよ、右近や侍従が絶えず浮舟から聞いていたように、彼女に死ぬ意志があったことは確かであった。彼女が身投げの例としてあげた「(昔の)懸想する人」は、玉上^{タカミ}弥弥氏も指摘されるとおり、菟原処女をさしている。しかし、彼女は、二人の男に代わろうとして自分の身を犠牲にしていた、あの恋に生命を燃焼させている菟原処女とは違つて、二人の男の間をさまよい、懊悩の果てに死を選んだはかない女性であった。

そして、狭衣物語によると、飛鳥井姫の入水は次のように語られている。狭衣中将は、仁和寺の威儀師にかどわかされようとしていた飛鳥井姫の危機を救い、彼女の許に通うようになる。姫は身分を隠す中将にうす／＼とは感づくが、はき／＼とは問い詰めたりしないやさしく可憐な人柄である。姫は懐妊するが、彼女は身分の違いを気にしてそれを中将に告げることもしない。そうしているうちに、生活の不如意を感じた乳母は、太秦の寺で見染めていた式部太輔に姫を盗ませ、舟に乗せて筑紫に下らせる。姫は中将を恋慕うあまり、虫明の瀬戸で入水自殺を計るが、兄に当たる僧に救われる。世慣れぬなよ／＼とした姫は、彼女の意志に反して、中将と引き離されて筑紫に連れて行かれようとしても、敢えて反対せず、海に沈ん

で中将と来世で会おうと望む頼りない存在でしかない。中将は、姫を大和物語の猿沢の池に潜いた采女にも比して愛着を覚え、その死を悼むというはかない恋が語られている。

さらに、「朝倉の物語」の朝倉姫の失踪、投身の原因は、松尾聰博士の「平安時代物語の研究」によると、次のようになっている。姫は三位中将と熱烈に愛し合っていたにもかかわらず、式部卿宮との一夜の契りにより懐妊した上に、三位中将(今では閑白)の正妻堀河殿が、夫と姫(今では朝倉君)との離間を計ったこともあって、二人の間に夜離れになり、心細くなった彼女は、陸奥の父が恋しくなり訪ねて行くとするが、か弱い女の身では到底行き着くことができそうになく、生きる望みを失なつて淡海の湖に飛び込んでしまふ。しかし彼女は運よく助けられて石山寺に参籠する。松尾博士の言われるように、ここにも源氏物語浮舟入水の影響がみられるのであるが、水中に揺れる藻のようにはなく運命に翻弄される姫君の様子が哀調も深く語られている。

以上見てきたように、菟原処女は二人の男を慕うあまり深淵に入り、浮舟も二人の男の間にあって恋の思いがつのるにもかかわらずどちらとも決めかねて入水している。一方、采女や飛鳥井姫や朝倉君は、恋人と引き離されて現世の無常に思い至り、底の水層となつている。その中でも飛鳥井姫や朝倉君は、三途^{ミチ}の川の傍で恋人と逢瀬を持つことを待ち望んで来世に憧れている。

(三)

ところで、中世の軍記物語にもしばしば女性の入水の場面が描か

れている。

陸奥話記を見ると、安倍頼時及びその子貞任・宗任が、源頼義・義家親子に降った時、貞任の弟則任の妻の壮烈な最期を、「但、柵破^レ之時、則任^ガ妻獨^リ抱^キ三歳^ノ男^一、語^レテ夫^ニ言^フ、君將^ニ没^スキント。妾不^レ得^テ獨^リ生^{ケル}。請^フ君^ヲ前^ニ先^ニ死^{サシ}。則^チ乍^ラ抱^キ兒^ヲ、自^ラ投^テ深淵^ニ死^ス。可^レ謂^フ一烈女^ト矣。」と伝えて、夫を慕うあまり覚悟の死を遂げた彼女を称賛している。この話は、今昔物語集卷二十五「源頼義朝臣尉・安倍貞任等」語にも、貞任の妻の話として述べられ、また十訓抄第六「可存忠直事」には則任の妻の話として載せられているが、いずれも妻が夫を思う殊勝な心情に感動している。

ここで注目されることは、陸奥話記には、他の二書に見られない「可^レ謂^フ一烈女^ト矣。」という作者の贊辭が付け加えられていることである。「烈女」という語は、史記刺客列伝「摂政伝」に、摂政の姉栄が、政が韓の大臣を殺したという人々の非難を物とせず、死を賭けて弟を弁護し、その恥を雪ごうとした時、人々が彼女を「非^ニ獨^リ政^ヲ能^{フル}一也。乃^チ其^ノ姉^モ亦^シ烈女^也」と言つて称えた所に出ている。また文華秀麗集には、白髪になるまで嵯峨天皇の後宮に貞淑に侍った小野石子を、藤原冬嗣が、「烈女^ヲ傳文載^ス俊良^ト」と詠んで、「烈女」として称賛している。この陸奥話記の「烈女」も、氣象のしつかりした褒の正しい女性の意味で用いられる。

(四)

保元物語には、為義北の方の入水の後日談として、人々が、「賢臣二君に仕ず、貞女両夫にまみえずと云文有」と噂し合つて、北の方の夫を思う気持ちに打たれたことが載っている。これは、盛んに中国の故事を引いて情趣を深めようとする作者の意圖の表われで、史記田單伝の文句をそのまま借用している。

この「貞女」という語は、文華秀麗集に小野石子のことを、桑原腹赤が、「孤墳対^メ月^ニ貞女^秋」と称えて詠んだ所にも出てくる。また十訓抄第六「可存忠直事」にも、「唐土貞女事」として、「虞舜帝^ノ后娥皇^女」英二人ながら湘水の底におぼれ」と述べられている。従つて、「貞女」という漢語は「烈女」と語意が同じであり、共に平安朝の漢詩文において節操の固い女性を賛める場合に、しばしば用いられ、また軍記物語でも夫の後を追つて入水した女性を称える場合に慣用的に用いられている。この「小宰相身投」の場合も、保元物語と同じく史記の語句を作者の感想として最後に引用して、小宰相をたぐい稀な深い心の持ち主として賞揚している。

(五)

平家物語の小宰相身投げの物語は、保元物語の為義北の方入水の話を受け継いで書かれていることは、すでに後藤丹治氏が述べておられる。後藤氏は両者を比較して、趣向や詞句が一致する点が多く存在することを証明されている。しかし、小宰相身投げの物語は為義北の方の物語と語句は一致する箇所があるものの、その構想は史

実を基にして創作したものであり、そこには平家物語独自の、中世を生きた女性の一つの典型が語られている。

保元物語によると、為義の北の方は、「男にをくれ、子に別」れたことを嘆き悲しんで入水したと語られている。小宰相の話にも懐妊の事が出てくるが、彼女はそれを、やがて生まれる子を見るにつけても通盛のことが思われてならないだろうと言って、通盛との別れを惜しむことに結びつけており、夫婦の深い繋がりを印象づけている。また保元物語では、乳母の女房を初めとして人々が、身投げしようとした為義の北の方を諫める時に、「昔は胡塞萬里の雲路に鏡の影をかこちわび、燕子楼の霜月に夜々心を傷しむ」と中国の例を引いて、入水の罪深さをあげつらっている。平家物語では、乳母の女房は、一谷合戦の戦死者の妻の心も思いやり軽卒を警めよと現実立って訴えており、より印象が深くなっている。

小宰相は、通盛の侍君太瀧口時員から夫の討ち死にを聞かされる。彼女は、「一ぢやううたれぬときゝたまへども、もしひが事にてもやあるらん、いきてかへらるゝ事もや」と、日を待ち暮らす、夫は帰って来ず、八島へ着こうとする日の背も過ぎる頃になって、始めて、「このほどは、三位うたれぬときゝつれども、まこととおもはでありつるが、このくれほどより、さもあるらんとおもひさだめであるぞとよ。人ごとにみなと河とかやのしもにてうたれにしろはいへども、そののちいきてあひたりといふものは一人もなし。あすうちいでんとての夜、あからさまなところにてゆきあひたりしかば、いっよりも心ほそげにうちなげきて、『明日のいくさには、一ぢやううたれなんすとおぼゆるはとよ。我いかにもなりなんのち、

人はいかゞし給ふべき』なんどいひしかども、いくさはいつもの事なれば、一ぢやうさるべしとおもはざりける事のくやしきよ」と、来世で共に会おうと約束しなかったことを辛く思う。「たゞならず成たる事をも、日ごろはかくしていはざりしかども、心づよおもはれじとて、いひだしたりしかば、なのめならすうれしげ」であった。それにつけても、「しづかにみみとなつてのち、おさなきものをそだてて、なき人のかたみにもみはやとおもへども、おさなきものをみんたびごとには、むかしの人のみこひしくて、おもひの数はつもるとも、なぐさむことはよもあらじ」と、逆接助詞「ども」や「とも」を多用して、過去や未来の出来事に対して、それは自分が予想もしていなかった（していない）不本意な事だと思いつく。このように「心にまかせぬ世のならひ」は、思いがけない再婚といった事態も予想される。ここに至って、小宰相は、「いきてあてとにかくに人をこひしとおもはんより、たゞ水の底へいらばや」と決心し、乳母の女房が寝入った隙に、月の入る西に向かって手を合わせ、「沖のしら洲に鳴千鳥、あまのとわたる梶の音」を聞いていっそう感慨を深くし、阿弥陀如来に「必ずひとつはちすにむかへたまへ」と祈って、ついに海に沈んでしまう。この「沖のしら洲に鳴千鳥」は「有明の月影さむみ難波がたおきのしら洲に千鳥なくなり」（新千載和歌集卷六俊恵法師）の歌に見え、また「あまのとわたる梶の音」は、「水まさり浅き瀬しらすなりぬとも天のと渡る舟はなしやは」（後撰和歌集卷五詠人しらす）の歌に詠まれている。このような平安歌謡の使用によって、それらが通盛に引かれる小宰相の遺瀕ない思いと融け合って、入水の瞬間のあはれさが余情も深

く扼えられている。

しかし、ここでは小宰相身投げの悲哀を中心に語ろうとするのではない。男を傷つけないためには入水をも辞さない菟原処女の恋の情熱、恋人との仲を運命によって無惨に引き裂かれ、世をはかなんで底の藻屑となった飛鳥井姫や朝倉君達。奈良や平安の物語では入水するのは女性であり、男は脇役として悲劇を構成する。一方、小宰相の入水の契機は、通盛の討ち死であり、彼女の人生は通盛と深く係わっており、彼女は通盛と一緒に融け合うことを願って入水していく。ここには、奈良や平安の女性達のような離別の悲哀はあらわには語られていない。小宰相は来世で再び通盛と結びつき、二人の絆は永遠に絶えない強いものとして述べられている。

奈良や平安の女性達の入水と小宰相の身投げの描写のこのような違いの一つには、当時の婚姻形態の相違（現に同じ軍記物語でも、陸奥話記では妻が夫の死ぬ前に溺に投身している）から来るものであろうが、しかし平家物語の作者は、そのような制度の違いを越えて、一人の中世女性が夫の戦死の悲しみを乗り越えていく昇華された愛の姿を描いて、香り高いロマンの世界を現出している。

三、結論

以上見てきたように、覚一本平家物語「小宰相身投げ」の章は、単なる貞女の話ではなく、ここには小宰相の通盛に対するいかなる思いが語られている。その構成も、延慶本平家物語や長門本平家物語とは順序を逆にして、先ず小宰相が心ならずも別れた通盛との妹背の仲を悲しんで入水したことを述べ、ついで通盛との出会いが語ら

れている。二人のほほえましい恋の経緯が後で記されているために、かえって別れの悲痛さと再会への願いは強まるのである。

平家物語を續くと、夫重衡の死を知って憂いに沈む北の方が、「まことに別れたてまつりし後は、越前三位のうへの様に水の底にもしづむべかりしが」（巻十一重衡被斬）と言っているように、戦争による離別の嘆きが屢々描かれている。しかし、その中でも小宰相は、戦いにより通盛と引き裂かれた事実を主体的に受け止め、再び来世で通盛と会えることを願って投身するのであり、そのけなげさは世にも希なものであった。そして、小宰相の通盛に対する思いの深さは、人間の理知を越えた運命としての別れによっても、少しも弱まることを知らないものであった。

従って、小宰相の通盛に対する返歌はすでに彼女のいちずな思いがよまれているものとして、解釈は次のようになるであろう。

上の句は、「まろ木橋」を小宰相と通盛の恋にたとえており、二人の恋がいつまでも続くことをひたすらに信頼せよと言っている。下の句の「ふみかへし」は、「文返し」と「踏み返し」の掛詞であり、「文返し」は蜻蛉日記に「心あるとふみかへすとん（も）浜千鳥うらにのみこそあととゞめめ」と詠まれているように、小宰相が通盛に手紙を返却する意を表わしている。「落ち」は「なびく」の意は含んでおらず、単に「（小宰相が）落つ」の意に用いられており、「やは」は反語の助詞である。「ふみかへしてはおちざらめやは」は、丸木橋を渡りかけて強くまた踏み返して川に落ちることを比喻として表現して、通盛の手紙を受け取らずに返して二人の仲が疎遠になることを意味している。そしてこの歌は、言外にこうして

ど返事を差し上げていますように私は一筋にあなたをお慕い申していますということ伝えようとしている。

よってこの歌の意味は、

ひたすらに私達の恋を信頼して下さい。丸木橋を渡りかけて踏返しては橋から落ちるであろうように、私があなたのお手紙をお返しては私達の恋はと絶えるでしょう。(しかし私は、あなたのこの好意をそつげなくするような危うい心の持ち主ではありません。)

関守次男氏は、「歌ことは「ふみかへされて」の解釈」(『国語国文』三八・一〇—S44・10)の中で、この小宰相の返歌の「ふみかへされて」の意味を検討されて、「かへす」に反覆・逆もどり・顛倒の三義が認められる中で逆もどりの意を表わしていると説かれている。また佐藤喜代治氏は、「国語学の展望・語彙意味(史的研究)」第八号—S45・6)に於いて、岩手方言の「フンゲス」及び全国方言辞典に採られている「ふんぐらがえす」が「ふみかへす」の元の形であろうとされ、足首をねじると訳されている。

ところで、「ふみかへす」の用例を調べてみると、

舟はちみさし、くるとふみかへしてしなりけり(平家物語巻九「落足」)
は踏まれて顛覆する意を表わす。また、

中人違約恋

いはせ川中のだえの丸はしは道よりふみもかへすなりけり(林葉和歌集第五恋歌)

は同じ道を引き返す意を示す。また前述した蜻蛉日記の兼家の歌の「ふみかへす」は、書物を返却する意の「文返す」に、千鳥が自

分の足跡をたどって踏み戻る意の「踏み返す」を掛けることによって、兼家の心を踏みにじる意を表わしている。

従って小宰相の歌の「ふみかへす」も、「かへす」に強調の意味がうかがえることから、反復継続して踏む意に使われており、通盛の心を冷淡に取り扱うことであった。

なお「落ちざらめやは」の「落つ」の意味は、「おそろしや木曾の懸路の丸木橋ふみ見る度に落ちぬべきかな」(千載和歌集巻十八「群書歌」とあるように、僧が女のために墮落する意に用いられた例もあるが、ここでは「くひ若衆をおちいらせうとて、竹へげのく丸はしをわたいた」(関吟集)に見られるように、不安定な丸橋を踏み返して落る意を表わしており、通盛と小宰相の恋が駄目になることを譬えている。そして危うく断たれそうになった二人の恋は、上西門院の機転によりめでたく成就するのである。

注1 「源氏物語評釈」第十二巻「浮舟」一六五頁

注2 「平安時代物語の研究」一六「朝倉の物語」二七九頁

注3 源氏物語事典上巻「みつせがは」

注4 哀傷。奉_レ和シ「傷_ムニ野女侍中_ヲ」

注5 「国文学論叢」第二輯「中世文学」二二頁

注6 哀傷。奉_レ和シ「傷_ムニ野女侍中_ヲ」

なお、文中に引用した書物は、後拾遺和歌集・新統古今和歌集・新千載和歌集・後撰和歌集(国歌大観)、陸奥語記・林葉和歌集(群書類従本)、関吟集(統群書類従本)十訓抄(国史大系本)、史記(中国古典選、史記)の他は日本古典文学大系本に拠った。

(本学第一〇回卒業 岡山県立総社高校教諭)